

近代の西山家住宅における重森三玲の作庭に関する一考察

A study on the Garden of Shigemori Mirei in Nishiyama House

林 まゆみ* 栗野 隆**

Mayumi HAYASHI Takashi AWANO

Abstract: Mirei Shigemori is a person who has left a great footprint in the history of modern Japanese gardens. In this article, we discussed the value of his garden built in Toyonaka Osaka, which the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology proposed as a national scenic spot in June 2019. First of all, this garden is worth having abundant materials. We compared the Mirei Shigemori's blueprints with the current situation in the garden and analyzed them by referring to materials such as "Rinsen" and other documents. Also we had hearing survey to the present owner and the gardener. As a result, gardens were constructed in modern suburban residential areas around Osaka and Kobe, and the close relationship between the garden and architecture as well as the owner and gardener could be verified. It was also understood that the garden was influenced by the owner's wishes and restrictions on site conditions, but it still revealed the unique personality of Mirei Shigemori as his early garden. Many kinds of stones and plants were used to express Mirei Shigemori's idea. In this way, we were able to understand the gardening process and its characteristics established in the early works of Mirei Shigemori in 1940.

Keywords: Japanese garden, Mirei Shigemori, modern residence, Nishiyama Garden

キーワード: 日本庭園, 重森三玲, 近代住宅, 西山氏庭園

1. はじめに

近代日本庭園を語るとき、重森三玲（1896～1975、以下重森）は、その作風や哲学からも欠かせない作家の一人である。重森に関しては、多くの論考がみられる。クリスチャン・チュミは、その論考¹⁾の中で、「重森は独自のスタイルを枯山水庭園においても明確にしており、従来からの典型的な庭園のスタイルに付け加えて、色や、線などの絵画的な要素を付け加えようとした」と述べている。中田勝康は、その著書の中で、当論文の対象とする西山氏庭園について「もともとは池泉庭園であったものを改修し、枯山水で造った。庭は建築と一体となっている。」と記している²⁾。重森三玲は西山氏庭園における重森の「見立て」の独自性を論じている³⁾。

重森は、昭和11（1936）年からの3年間に全国の庭園の実測調査を行って、同14（1939）年までに約250ヶ所の庭園を含む『日本庭園史図鑑』全26巻を著している。さらに実測を続け、多くの日本庭園に関する知見を積んだ。これらの作業過程が彼の作庭の基盤となったことは疑いない。ただ、数多い重森の住宅庭園に関して、十分な資料や現状保存が十分でない場合も少なくなく、今回の調査研究においては、前段となる資料や現状保存が良好であることも当庭園の価値を立証する背景となっている。

上記の先行研究等からも重森三玲の初期の作品の作庭プロセスを近代住宅との関連や、その経緯を詳細に検証した論述は見当たらない。本論文では、令和元年6月に文化庁において、国の名勝に指定するべく答申及び告示された昭和15年代の重森の初期の作庭である西山氏庭園について論考した。実際に作庭された経緯を追い、資料や現存する庭園を基にしながら重森作品の特徴や、その作庭プロセス、ならびに施主・西山丑之助（1894～1976）の庭園志向を検証した。あわせて、本庭園が所在する岡町住宅地は明治45（1912）年に開発・分譲され、箕面有馬電気軌道宝塚沿線の住宅地では池田市室町住宅地（1910）、箕面市桜井住宅地（1911）に次ぐ早い時期の郊外住宅地である。そこで西山氏庭園の岡町住宅地という郊外住宅地の庭園の特色の一端についても把

握することを目的とした。

2. 方法

重森による西山氏庭園では、比較的多くの資料が残されており、図面や、雑誌「林泉」の「林泉日録抄」（重森の日誌）、その他の資料から論考を進めることが可能であった。用いた資料と論考としては、①建物配置と庭園構成においては、平成20（2008）年1月作成の最新の平面実測図、及び現地調査から分析を試みた。②作庭の経緯と経過については、重森の「林泉日録抄」および施工を担当した川崎順一郎の工事計算書の記述、西山氏庭園の管理を重森が作庭する以前から担当していた小寺巳之助（植巳庭苑初代）の孫で現在まで本庭園の管理を担当してきた植巳庭苑3代目小寺健弉氏への聞き取り調査をもとに、その経緯と経過を検証した。③設計図・古写真等と現況との比較に関しては、重森による設計図及び庭園竣工前後の写真から現況を比較して、考察した。④造園材料からの検討については、重森の設計図と川崎の工事計算書との照合、西山敏行氏、小寺氏への聞き取り調査、岡町住宅地に残存する近代の住宅庭園を対象とした類例調査から分析した。

3. 結果および考察

（1）建物配置と庭園構成

岡町住宅地の建売住宅として分譲された和館を西山丑之助が購入したのは大正元（1912）年であった⁴⁾。大正5（1916）年までに洋館の建設がなされ、昭和4（1929）年には南庭に離れ（「放座敷」）が新築された⁴⁾。昭和14（1939）年から16（1941）年の間には和館と洋館が渡廊下で接続されたり、離れや茶室が改装されたりした⁴⁾。庭園は上記建築群の改装に合わせて昭和15年（1940）に改造され、現在の建物配置・庭園構成が完成した⁴⁾。

西山氏庭園の敷地は、東西約22m、南北約47mの南北に長い敷地をなす。敷地北に正門を開いて北側に主屋を構え、敷地南に洋館、離れ、茶室を配置する。主屋と洋館とは渡廊下で接続され、離れの東に茶室を隣接する。現地調査⁵⁾の結果、本庭園は上記の

*兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 / 兵庫県立淡路路景観園芸学校

**東京農業大学地域環境科学部

建造物群と一体的な関係を持ちながら作庭されていることが確認でき、地割上の特徴から、①南庭（青龍庭）、②中庭、③北西庭、④北東庭の4庭に区分することができた（図-1）。

①南庭（青龍庭）：離れの北側から東にかけて展開された最大規模で造形的にも力を入れられた本庭園の中心となる庭である。庭の北辺と東辺の背後に石積みを実施して盛土し、その高低差を利用して北に枯滝石組を構え、東に立石を主とした石組を施す。滝石組から蛇行する枯流れを南流させ、流末に四角形の手水を配する。流れのほぼ中央の西に盛砂を設ける。枯滝石組が龍頭、枯流れが龍の胴体、砂盛は龍が抱いた玉を表したものとされる⁹⁾。渡廊下一帯は洋館が建つ地盤高と庭園の地盤高とを解消するように築山のように造成し、荒々しく石組を施す。この南庭は重森三玲によって「青龍庭」と命名された⁹⁾。庭園名の由来は、作庭された年が辰年であったこと、四神のなかでも青龍を作庭の主題としたことが三玲筆の扁額⁹⁾から確認できる。

②中庭：主屋南側の平庭である。主屋東西棟南面、主屋南北棟東面に沓脱石を配置し、主屋南北棟和室に縁を取り付けて鉢前を構える。この鉢前を中心に沓脱石を飛石園路で連絡していることから形式的には書院式露地といえる。主屋に対してほぼ45度に斜行する直線の石敷きを設けて地模様を描き、石敷きの東側に雄側石、雌側石とも鼻を出した受け組の井筒を設ける。

③北西庭：主屋応接室（旧和室7畳）、中仕切塀、旧内玄関中廊

下によってコの字形に囲まれた坪庭である。旧縁側に面して沓脱石を配し、小池状に地面を掘り窪めて中央に手水を配し、下り躊躇を構える。

④北東庭：正門から主屋本玄関に至るまでの前庭である。通路は緩く曲がる藪敷きの延段とした意匠を採用する。

（2）作庭の経緯と経過

本庭園については、三越大阪支店住宅建築部技師の岡田孝男が、西山丑之助より茶室の改装を依頼された際に庭園も改造することとなり、岡田が、京都の庭師・川崎順一郎に作庭を依頼した⁷⁾。ただし、川崎は庭園の設計を重森三玲に依頼した⁷⁾ことが、重森が本庭園に深く関与することとなった経緯であった。本節では、重森の「林泉日録抄」⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾および川崎の工事見積書¹³⁾工事計算書¹⁴⁾の記述をもとに、本庭園の作庭の経過を整理しつつ、重森の作庭活動における本庭園の位置づけを考察する。

重森による庭園の設計時期は昭和15（1940）年2～3月であり⁸⁾⁹⁾、庭園工事は4～6月におこなわれた¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾。2月18日に重森は川崎と大阪三越を訪問し、岡田と会ったのち、西山邸で1時間程度話をしており、この時に初めて西山と重森とが会ったと考えられる⁸⁾。2月下旬に設計作業に努力した重森は、3月17日に西山邸に完成した設計図を持参し、3月27日、31日にも西山邸で打ち合わせをおこなっている⁹⁾。特に27日は「晩方まで馳走に成りつつ話す」⁹⁾とあり、本庭園の作庭に関して長時間の意見交換がおこなわれたと推察される。工事は4月1日より川崎により着手されたが¹⁴⁾、重森は4月8日に滝石組前の松の移植の指導から始まり¹⁰⁾、4月中旬から下旬にかけて枯滝石組の作庭指導をおこない¹⁰⁾、5月～6月に枯流れの上・中流、東辺および西辺の築山上の石組の指導をおこなった¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾。特に、4月25日、5月5日の記事に見えるように、4月下旬から5月上旬は、数多くの石組を手掛けたことがわかる¹⁰⁾¹¹⁾。6月には、砂盛ならびに枯流れ下流、待合周辺の作庭指導がなされた¹²⁾。以上の作庭経過をまとめたものが表-1、図-2である。

ここで注目されることは、西山氏庭園の作庭中に徳島の庭園調査を重森が行っていたことである¹⁰⁾。重森の作風は、青石（緑泥片岩）をふんだんに使用した立石を主とする力強い石組の庭であることが知られているが、西山氏庭園は青石以外にも様々な石を利用して、立石と青石を基調とした作風の確立は、重森千青によれば昭和15（1940）年の9月からであり、そのきっかけは同年4月に訪れた旧徳島城表御殿庭園で青石のみで組む石組の美しさを確認し、その後、4月27日に確認した阿波国分寺庭園を見たときの衝撃が、重森の庭園観を根底から覆し、阿波国分寺庭園に勝る造形を志向する作品に変化していったという¹⁵⁾。

したがって西山氏庭園は、青石のみで構成された庭園に衝撃を受けた最中に作庭された庭園であり、重森の作風が確立される過渡期の実例であることが分かった。

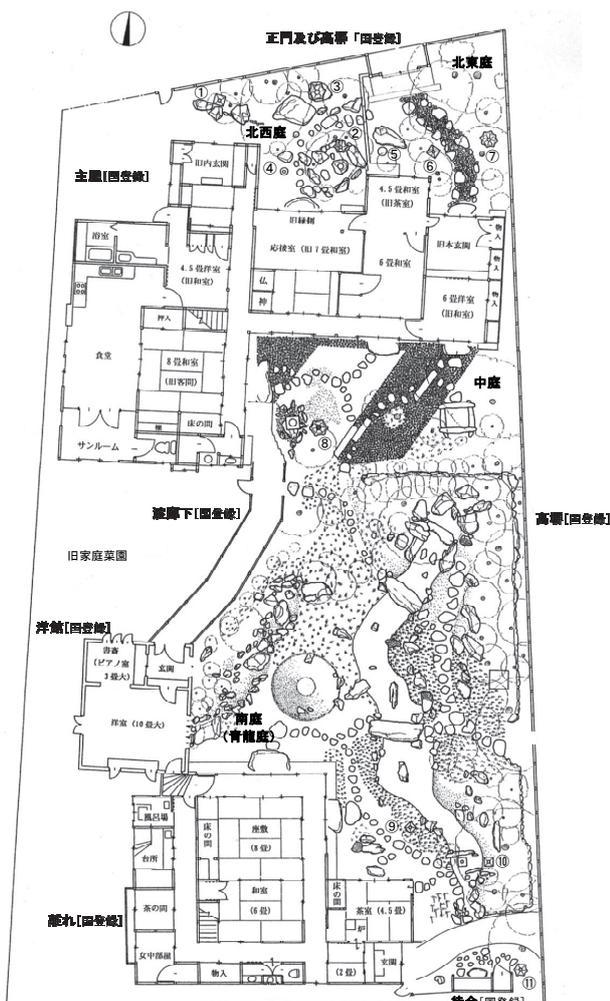
なお、重森の作庭指導は南庭（青龍庭）と中庭には確認できるが、北東庭、北西庭の指導記事はない。川崎からの工事見積書、計算書が同封された封筒¹⁶⁾の表書きには、「本庭 室町時代式枯山水／表庭 京風下り躊躇式／指導 重森三玲先生／施工 京都川崎順一郎」（文中の／は改行を示す）と手書きで記されており、北西庭の指導も重森であったことが示唆される。この解釈を敷衍すれば北東庭の指導も重森によると考えられる。

（3）設計図・古写真等と現況との比較

西山家には昭和15（1940）年3月作成の重森三玲による設計図として平面図¹⁷⁾と立面図¹⁸⁾（表現は立面図ではなく姿図）が伝わる（図-3、図-4）。本節では、2点の設計図と古写真・現況とを比較し、設計案がどの程度実現されているのかを確認する。

1）南庭（青龍庭）（写真-1）

南庭（青龍庭）の設計の考え方は、前節で述べたように玉を抱



※図中①～⑪は石灯籠

図-1 西山氏庭園現況平面図（豊中市教育委員会所蔵）

表-1 「林泉日録抄」^{8~12} にみる西山氏庭園の作庭過程

番号	日付	「林泉日録抄」の記述
①	4月8日	瀧前の松移植を指導して二時に帰り(略)。
②	4月14日	岡町西山氏庭園の地割を行ふ。鍋島君も同伴なり。枯滝の石四個のみ組む。大仙院式に新手法を試む。
③	4月23日	蓬莱石その他三個ばかりを組む。巨石にて思う様に動かず。漸やく立て終わる。
④	4月24日	瀧添石を組む。
⑤	4月25日	築山部の石組を行ふ。甚だ調子よく、十八個を組む。景観美しく成りたれば、西山氏も喜ぶ。
	4月27日	朝四時小松島へ安着、五時二十分徳島へ着く(略)国分寺に疎石を一覧に行く。堂後の豪華なる桃山初期庭園ありしを発見する。千秋園と並び称すべき名園なり。豪華にして、且つ、技術傑出せる石組に驚く。
	5月3日	カシの大木植込を指導して帰る。
⑥	5月5日	鍋島氏同伴にて西山氏庭園指導に行く。川崎氏、鍋島氏十一時に帰宅され、十時頃より築山の石組を指導して夜に入る。約六十個を組む。小石ながら、これだけ一日に組みたるは近來になく、且つ好調子に出来る。
⑦	5月11日	上手の石橋その他付近の石組を指導。本日松、垂梅、その他到着。
⑧	5月19日	瀧の添松、洋館附近のマキその他サツキを植え、更に銀閣寺手水鉢の石組を曼殊院形式にて組み、三月堂型の石燈籠を据える。中々立派なる出来栄にて一段とこの附近引き立つを覚ゆ。
⑨	5月23日	川下の流れの手水鉢、その他を組む。苔も一部分敷かれたれば美事なり。
⑩	5月27日	下手の石橋その他砂盛付近の石を組む。
	6月1日	西宮に至り徳島石を一覧し、舟石その他を選定、この舟石は大仙院庭園の舟石よりも立派なる形にて非常に嬉し。西山氏庭園に入れる為に選定せしものなり。
⑪	6月5日	下流の蓬莱石、水分石、舟石その他を組む。イヨザサ、カンチク、ケヤキ、サンゴジュ、ダイスギ等も植える。
⑫	6月9日	待合の飛石その他を組む。
⑬	6月13日	向月台風の宝珠を作る。砂盛として最初の試作に就き苦心と興味あり。案外面白く出来上がる。西山氏庭園今日で大体指導すべき場所完成す。甚だ美観にて自から嬉し。
⑭	6月23日	流れの白川砂を敷く。一段と美事なり。

注：番号欄の丸数字は西山氏庭園作庭過程推定図の図中の番号と対応する。日付はすべて昭和15年(1940)を示す。

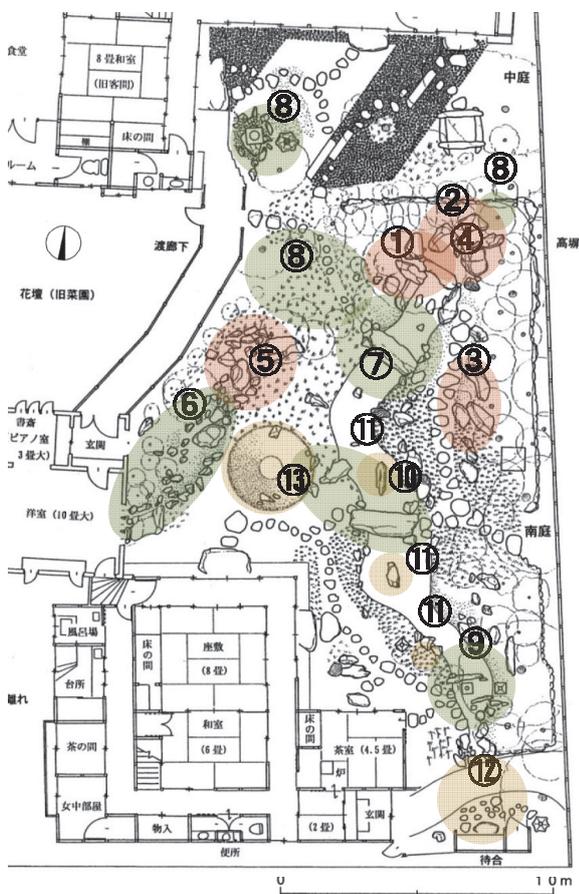


図-2 「林泉日録抄」^{8~12} の記述にみる西山氏庭園の作庭過程推定図(赤：4月施工、緑：5月施工、橙：6月施工)

える龍を表現したものであり、滝石組は「大仙院式」¹⁰、砂盛は慈照寺の「向月台風」¹²、「銀沙灘の再現」¹⁹としたものであった。なお、枯滝下流部の舟石は「大仙院庭園よりも立派なる形」¹¹と評価している。さらに、渡廊下側には数多くの立石を主とした集団石組を設けた設計案である。植栽に関しては、特に南庭東面が充実している。重森といえば、西山氏庭園を作庭した昭和前期では春日大社社務所庭園(昭和9年、昭和12年)、東福寺本坊庭園(昭和14年)の作庭がよく知られている。ただし、いずれの庭園も立石を主とした石組、直線やZ字形の地割の扱いなど、独特の造形を志向した。西山氏庭園では、造形的な植物の扱いは滝石組背後の高生垣にとどまり、基本的には自然樹形を基調とした植栽設計案となっている。さらにウメやキササゲを用いようとしたことが設計図より読み取れる。西山は重森に作庭を依頼するまで庭園を4、5回改造したほどの庭園好きであり²⁰、とりわけ花木を好んだ²¹という西山の趣味が発揮されたものと推察される。以上をふまえて施工後の庭園を確認したところ、枯滝の蛇行形態、砂盛の底部と頂部の大きさに違いが認められるものの、庭全体の地割は設計案通りに施工されたことが判明した。ただし、植栽については、中庭を区画する高生垣の樹種(設計案ではアラカシであるが実際はギンモクセイ)、キササゲの位置が異なる。さらに、集団石組には設計図では植栽はないが改造前から庭園に存在したマツを植栽し、後に西山がサクラを植栽したことが、下川苔地の写生画(図-5)²²や聞き取り調査⁷から確認できた。

2) 中庭(写真-2)

中庭の設計図と現況との違いについては、南庭(青龍庭)からの飛石園路がほぼ直打ちで中庭に達し、そのまま主屋の沓脱に達するようになっているが、現状では主屋の沓脱がやや東寄りにあるために飛石は曲がり打ちで施工されている点がまず挙げられる。また、主屋南西部の8畳和室(旧客間)の縁先手水は重森三玲の設計図では丸形の自然石であるが、現況は銀閣寺手水鉢である。ただし、斜行石敷き、葛石、井戸をとまなう書院式露地の地割はそのまま実現されたものといえる。

3) 北東庭

北東庭は、重森三玲の設計図では平面図のみであり、立面図には描かれていない。平面図は菱形の切石を用いた石敷きを雁行形に配置した斬新な意匠であるが、現況は真黒石の粒石敷きに丹波鞍馬石を延段縁辺部に敷き交ぜた覆崩しに近い意匠を見せる。中世作の八角形燈籠も平面図にはない。北東庭はこのように単純な設えを基本とし、重森三玲の作風には見られない数寄屋風の意匠とする。塀際のマツはほぼ図面どおりである。なお北東庭については古写真がなく、施工時の姿を確認することはできない。ただし、川崎順一郎は本名を川崎幸次郎といい、数寄屋風の庭を得意とした人物である²³。本庭園の石敷きの意匠は、指導は重森によるかもしれないが川崎の作風が現れたものと考えられる。

4) 北西庭(写真-3)

北西庭は、重森三玲の設計図には描かれていない。本庭については撮影年代が不明の古写真が存在する。古写真には前石と左右の役石、こぶし大のごろた石が縁石上に配置されている。古写真と現況とを比較すると、蹲踞の海の大きさ、燈籠の配置、前石の位置などが異なっている。また、手水背後には、新たに三角形の景石が現状では配されている。現在では、茶室や応接室が改装されており、入口が異なっていることから、この下り蹲踞の海の細部意匠が変わっているとみられ、重森の指導当時のものとは異なるものとなっていると考えられる。ただし、中央の手水は残存しており、下り蹲踞としての構成は保存されている。

(4) 造園材料からの検討

1) 石材

本庭園では、いくつかの種類の花崗石が石組や飛石、景石に用い

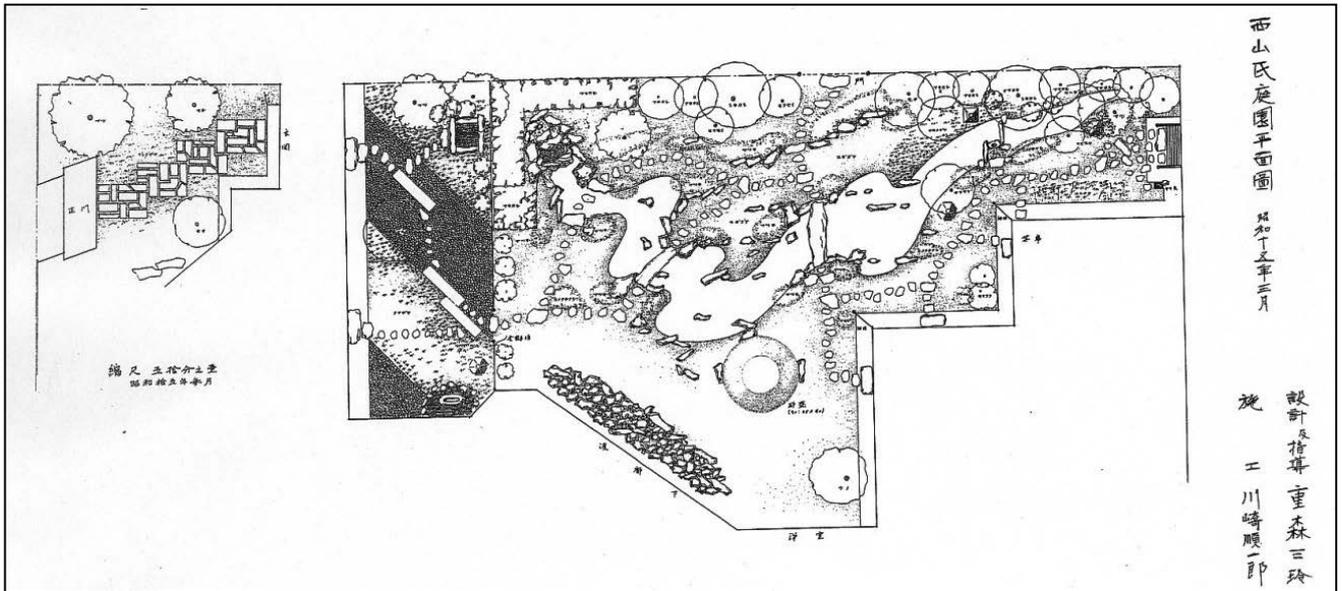


图-3 重森三玲作·西山氏庭園平面圖 (西山家所藏)

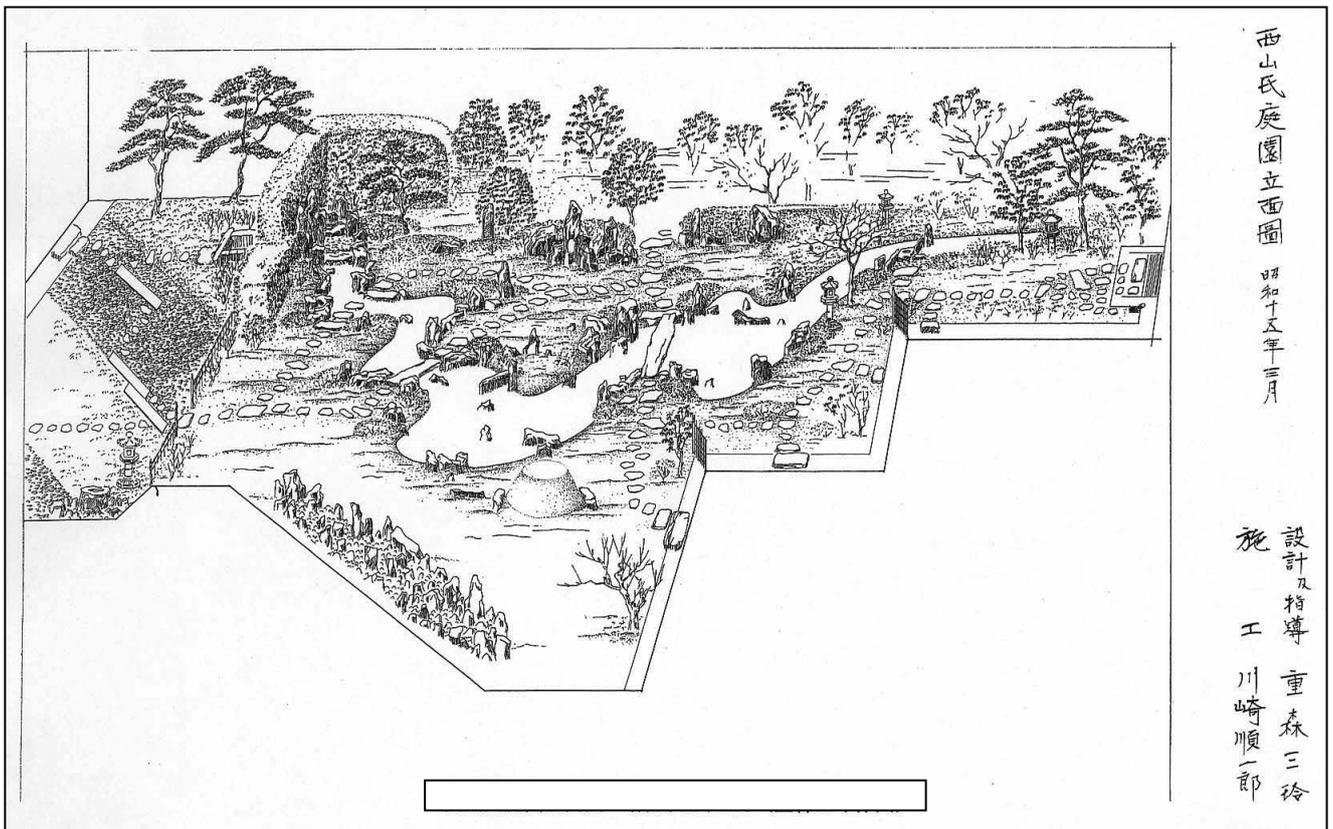


图-4 重森三玲作·西山氏庭園立面圖 (西山家所藏)

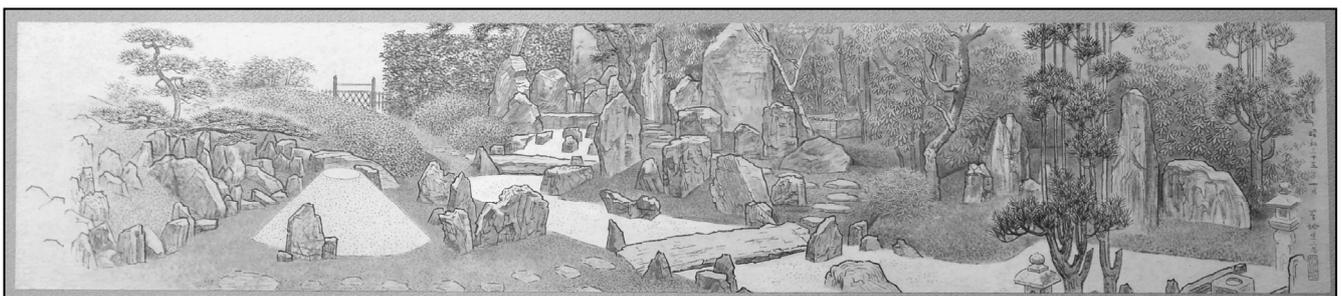


图-5 下川苔地作·西山氏庭園写生画 (西山家所藏)



写真-1 南庭（青龍庭）（西山家所蔵）



写真-2 中庭（西山家所蔵）



写真-3 北西庭（西山家所蔵）

られている。特に、西山丑之助が「瀬田の虎目石」²¹⁾と呼称した南郷石が枯滝石組の要所要所にみられ、戦前から戦後にかけて重森三玲が多用した青石（本庭園で確認されたのは徳島石）は南庭（青龍庭）の枯流れの石橋、流末の堰、舟石等に確認できる。

川崎順一郎からの見積書¹³⁾及び計算書¹⁴⁾を確認したところ、改造工事にかかわって搬入された石材を確認することができた。表-2は、工事計算書の記載内容をまとめたものである。「庭石」は見積書では「庭石 石組用」とあり、数量は120個であった。

重森の「林泉日録抄」や川崎の「林泉」の記事を精査すると、「西宮に至り徳島石を一覧し、舟石その他を選定」¹¹⁾とか「新たに搬入される南郷石や徳島石」¹⁹⁾という記述があることから西山氏庭園の徳島石、南郷石は重森の作庭にかかわって新たに導入されたもので、「庭石 石組用」の記載には、徳島石と南郷石が含まれていると指摘できる。飛石は67個、真黒石、鞍馬石、四国庭石（石種不明）も購入されていることが判明した。

このことをふまえて西山氏庭園の現地調査²⁰⁾をおこなった結果、新規に調達された石材とは思われないものも確認できた。具体的な石種としては、生駒石、宿野石、日下石が挙げられる。生駒石は南庭（青龍庭）では北面と東面の土留め石積み、離れ北面と東面の沓脱石・二番石、離れと茶室周辺の飛石、枯滝石組と集団石組のなかの大きな石、北東庭の日本玄関前の平石、北西庭の下り蹲踞の手水、海の組石の一部など、庭園内でも多用された石種である。宿野石は北西庭の旧縁側沓脱石や景石、下り蹲踞の海の組石、南庭（青龍庭）と北東庭の景石に確認され、日下石は中庭の沓脱石と井筒に認められた。

以上から、生駒石、宿野石、日下石は岡町住宅分譲時における庭園石材と考えられ、重森三玲、川崎順一郎が再利用した可能性が指摘できる。ただし井筒は、川崎の記事には「元よりある井筒」¹⁹⁾との記述があり、重森による作庭前から存在していたと指摘できるが、川崎の工事計算書¹⁴⁾にも確認でき（表-2）、その存否は判然としない。生駒石は、川崎が現地に入った際に「雑然と据えられた十数個の生駒石」¹⁹⁾とあり、小寺氏への聞き取り調査²¹⁾からは重森は鋭さに欠ける生駒石を好まなかったと西山から聞いていたこともうかがうことができた。以上から、生駒石は分譲時の造園石材を継承した可能性があるとして指摘できる。

以上の西山氏庭園の使用石材をふまえ、岡町住宅地の分譲時の造園石材の具体的な石種を把握するため分類調査²⁰⁾をおこなった。調査対象は岡町住宅地の良好な現存事例で、何れも戦前に主屋が建築された奥内氏庭園（奥内陶芸美術館庭園）、新堂氏庭園、丹生氏庭園である。調査の結果、3庭園は共通して景石、石組、飛石に生駒石、宿野石、日下石がよく使われていることが分かった。したがって西山氏庭園は、昭和15（1940）年に重森三玲によって改造されているが、造園材料としては、岡町住宅地という郊外の住宅庭園の造園材料を部分的に継承しながら作庭された蓋然性が高いものであることが分かった。すなわちこのことは、阪急の

表-2 西山氏庭園に調達された石材
（川崎順一郎「西山様邸庭園工事計算書」¹⁴⁾より作成）

位置	記載	数量	備考
南庭 （青龍庭） ・ 中庭	庭石		見積書では「庭石 石組用」と記載
	鞍馬玉石		
	真黒マキ石		
	飛石	67個	
	△四国 庭石		石種不明
	白川砂	自動車2台	
	タタミ/クラマ石 軒打 セメント/砂・深草	1切	中庭の石畳か
	四国産庭石	大2個	
	船石	1個	
	不詳	4個	
	待合クシ石	1（個）	クツ石（沓石）か
	柱 塚石	4個	
	待合用 サシ石		
	燈籠三月堂形	1基	主屋鉢前鉢明かり
	燈籠織部形	1基	流れ南蹲踞鉢明かり
	燈籠白大夫形	1基	待合東（現存しない）
	生込燈籠	1基	茶室北の枯流れ西岸
	蹲踞鉢	1（個）	枯流れ南
手水鉢銀閣寺形	1（個）	主屋鉢前鉢手水鉢	
井筒	1（基）	中庭	
石橋	1（枚）	見積書では2枚	
葛石	1（枚）	見積書では3枚	
井戸蓋	2枚		
北西東庭	鞍馬石 クツヌギ	1個	
	玄関ツタヒ 真黒石	7俵	
	タタミ 鐵皮石		丹波鞍馬石か
	蹲踞マキ石 浄土七寸石	1（切）	
	タタミ石 軒打 深草/セメント 砂	1切	

数量の括弧内の単位は、筆者が推定して記載したものである。

宝塚沿線の住宅地開発のなかでは初期の岡町住宅地という郊外住宅の庭園として、西山氏庭園は造園の材料的特徴を継承したものと指摘できる。

2) 植栽

川崎順一郎からの見積書¹³⁾及び計算書¹⁴⁾を確認したところ、改造工事にかかわって搬入された植栽を確認することができた。表-3は、工事計算書の記載内容をまとめたものである。ほぼ、重森三玲の設計図に記載されているものが工事計算書で確認できるが、重森の設計図にあつて川崎順一郎の計算書にないものとしては、カエデ、ヒサカキ、モッコク、ヒメクチナシ、アセビ、（南庭）、クス、ドウダンツツジ（中庭）、ブンゴザサ（北東庭）である。それとは反対に、重森の設計図にはないが、調達された植物としては、マキ、ハゼ、サンゴジュ、アカヤシオ、シャシャンボなどがある。特に、紅葉の美しいハゼ、花の美しいアカヤシオ、シャシャンボが含まれている。西山丑之助は重森三玲の庭にあまり木は要らないと小寺氏に話したこともあつた²¹⁾ようであるが、その後集団石組にサクラを西山が植栽した²¹⁾ことも考慮すると、本庭園

表-3 西山氏庭園に調達された植物
(川崎順一郎「西山様邸庭園工事計算書」¹⁴⁾より作成)

位置	記載	想定される樹種の和名	数量	備考	
南庭 (青龍庭) ・ 中庭	男松	クロマツ	1本		
	梅	ウメ (林泉日録抄のシダレウメか)	1本	現存	
	榎	イヌマキ、ラカンマキ、コウヤマキ	1本		
	榎	シラカシ、アラカシ	1本	現存	
	合杉	キタヤマダイスギ	7本	現存	
	キササゲ	キササゲ	1本	枯死	
	ワビスケ 白樺	ヤブツバキ	1本		
	モクセイ	キンモクセイ、ギンモクセイ	1本		
	榎	シラカシ、アラカシ	1本	現存	
	榎	シラカシ、アラカシ	20本	高さ10尺もの	
	榎	シラカシ、アラカシ	9本	高さ2間半もの	
	ハゼ	ヤマハゼ、ハゼノキ	1本		
	四方竹	シホウチク	20本	現存	
	寒竹	カンチク	20株		
	伊予笹	オカメザサ	30株	現存	
	銀木せ (犀)	ギンモクセイ	大5本	現存	
	金木せ (犀)	キンモクセイ	小5本	現存	
	サツキ	サツキツツジ	17本	現存	
	紅八汐	アカヤシオ	5本		
	目榎	ウバメガシカ	20本		
	南天	ナンテン	5本		
	熊笹	クマザサ	250株		
	モチ	モチ	2本		
	茶仙木	シャシャンボ	15株		
	青木	アオキ	5本		
	ネズミモチ	ネズミモチ	1本		
	サンゴジュ	サンゴジュ	1本		
	ケヤキ	ケヤキ	1本		
	トクサ	トクサ	5株		
	大 目榎	ウバメガシカ	2本		
	樺	ケヤキ	1本		
	杉苔	スギゴケ	60坪		
	北北 西東 庭庭	キャラ 木	キャラ	1本	
		ウバメ 榎	ウバメガシカ	1本	
銀木せ		ギンモクセイ	1本		
丸葉柊		マルバヒイラギ	1本		
杉苔		スギゴケ	2坪		

は、重森三玲による石組の世界に、植栽に代表される西山丑之助の庭園趣味が発揮されたものであったと指摘できる。

4. 総括

阪神間の郊外住宅地として明治末に開発・分譲された岡町住宅地は、大正初期に西山氏によって購入され、洋館や南庭とはなれの建設、さらには和館と洋館が渡り廊下で接続されるなど、増改築の結果、昭和15年の庭園の改造へと繋がる。西山に依頼された三越の岡田が、庭園の改造を川崎に依頼し、その設計に重森が加わったことが作庭の端緒となった。阪神間の郊外住宅地の庭園としての特徴として、庭園と建築との密なる関係性が挙げられる。

また、重森による設計図書、下川による写生、平面実測図や現況による比較、重森執筆の「林泉日録抄」、その他川崎の工事計算書、古写真、庭園の管理を担当している小寺健之氏への聞き取り調査など豊富な資料群と保存された現況も重要な特質である。

施主である西山が建築技師の岡田、庭師の川崎、そして作庭家の重森と繋がっていったことが、本庭園作庭の大きな契機となり、さらに重森は、川崎や、岡田、そして、西山と十分に議論を尽くしている。渡り廊下付近の岩石の林立と合わせた花木や、従前からの岩石の利用、東側の植物群は、施主の意向を反映したもので、西山の庭園趣味と造園家である重森の合議の結果が垣間見られる。

昭和15年に訪れた旧徳島城表御殿庭園や阿波国分寺庭園はその後の作庭に大きな影響を及ぼしている。西山氏庭園では、青石の林立は見られないまでも、その萌芽となる石の林立(渡り廊下付近)など重森の作風確立への過渡期となるものが認められる。気鋭の作庭家である重森の新しい取り組みが庭園に反映された。

5. 展望

郊外住宅地の庭園として、材料からその価値を明確にした部分はあるが、同時代の郊外住宅地の庭園としては接客本位の庭とともに家族本位の庭を重視する実用主義の庭が提言される時期でもあるので、今回は研究対象としなかった家庭菜園についても検討の余地がある。重森の作庭活動としては、過渡期の作風を示すものであることが導かれたが、重森の造園活動全体における過渡期の作風の位置づけについては不明確な点があり、その他の庭園における作風の変化等については、より詳細な検証が望まれる。

今回の研究をふまえて、今後の保存活用を検討することが、庭園保護上の課題として重要である。保存活用策を検討しながら、同時に本庭園の本質的価値をさらに検証していきたい。

謝辞

本論文の作成にあたって、豊中市教育委員会社会教育課、当代の西山氏、小寺氏他、大勢の皆さまのご協力に心より感謝したい。

補注及び引用文献

- クリスチャン・チュミ (2003) : 枯山水庭園の新様式に関する研究 : ランドスケープ研究 66(5), 413-416
- 中田勝康 (2009) : 重森三玲庭園の全貌 : 学芸出版社, 288pp
- 重森三明 (2010) : 重森三玲II : 京都通信社, 24-29
- 豊中市教育委員会による西山敏之氏 (西山丑之助ご子息) への聞き取り調査記録 : 2007年4月4日作成, 2008年3月22日追記 : 豊中市教育委員会所蔵
- 西山氏庭園現地調査 : 2018年11月9日 : 於西山氏庭園 (豊中市教育委員会立会い)
- 重森三玲 (1961) : 青龍庭 (扁額) : 西山家所蔵 (「青龍庭 西山家青龍庭旨昭和十五年庚辰ト吉日重森三玲作超因辰年成青龍枯流龍旨成枯満御国白砂盛宝玉茲圖下川苔地画伯為紀也 昭和三十六年辛丑一月 三玲)
- 小寺健之氏への聞き取り調査 : 2018年11月29日 : 於西山氏庭園 (豊中市教育委員会立会い)
- 重森三玲 (1940) : 林泉日録抄 (四) : 林泉 (64), 106-107
- 重森三玲 (1940) : 林泉日録抄 (五) : 林泉 (65), 131-133
- 重森三玲 (1940) : 林泉日録抄 (六) : 林泉 (66), 155-158
- 重森三玲 (1940) : 林泉日録抄 (七) : 林泉 (67), 182-184
- 重森三玲 (1940) : 林泉日録抄 (八) : 林泉 (68), 209-210
- 川崎順一郎 (1940) : 西山様邸庭園工事見積書 : 西山家所蔵
- 川崎順一郎 (1940) : 西山様邸庭園工事計算書 : 西山家所蔵
- 重森千青 (2016) : 伝統文化をベースに永遠のモダンを迫った革新者 重森三玲 : 庭NIWA (225) : 建築資料研究社, 72-75
- 川崎順一郎からの工事見積書・工事計算書を同封した封筒の表書きには「昭和十五年四月/岡町自宅庭園改造/本庭 室町時代式枯山水/表庭 京風下り踞躰式/指導 重森三玲先生/施工 川崎順一郎 (文中の/は改行を示す) とある。表面は手書きで「自宅改造」とあるので、西山丑之助の自筆によるものと考えられる。
- 重森三玲 (1940) : 西山氏庭園平面図 昭和十五年三月 : 西山家所蔵
- 重森三玲 (1940) : 西山氏庭園立面図 昭和十五年三月 : 西山家所蔵
- 川崎順一郎 (1940) : 西山邸の庭園 : 林泉 (68), 194-196
- 重森三玲 (1964) : 西山丑之助庭園 青龍(ママ)庭 : 庭 重森三玲作品集所収 (下中邦彦編) : 平凡社, 194
- 小寺健之氏への聞き取り調査 : 2018年11月5日 : 於西山氏庭園 (豊中市教育委員会立会い)
- 下川苔地 (1960) : 西山氏庭園写生画 : 西山家所蔵
- 豊中市教育委員会による川崎庭園への聞き取り調査記録 : 2018年11月29日作成 : 豊中市教育委員会所蔵。なお、川崎幸次郎による数寄屋風の庭は、川崎幸次郎 (1994) 『数寄の庭 川崎幸次郎作庭集』 (淡交社) に詳しい。
- 西山氏庭園現地調査 : 2018年11月29日 : 於西山氏庭園 (小寺健之氏・豊中市教育委員会立会い)
- 岡町住宅地類例庭園調査 : 2018年11月29日 : 奥内氏庭園 (奥内陶芸美術館庭園), 新堂氏庭園, 丹生氏庭園 (小寺健之氏・豊中市教育委員会立会い)

(2019.9.28受付, 2020.3.30受理)